

巻頭言

進化と多様性と優生学について

千葉聡 (教授、センター長)



最近、進化という言葉が様々な所で使われているので、念を押しておきたいのだが、生物学上の進化と、それ以外の分野での進化は、意味が異なる。普通、進化は進歩とほぼ同義語として使われるが、生物学上の進化は進歩ではない。方向性のない、世代を超えた遺伝する性質の変化の意味である。進歩を意味しない進化を着想したのは、ダーウィンだとされるが、生物学者が進歩の意味で決して進化を使わないのには、もう一つ事情がある。19世紀後半から20世紀半ばまで、進化は優生学とほぼ一体だったという、恐ろしい歴史的背景があるからだ。人間の遺伝的改良(進歩)のため、進化と遺伝学の理論が利用されたのだ。優生学と言えばナチスの大量殺戮と強制不妊化しか知らない人が多いが、実はその手本を創ったのは米国であり、元祖は英国である。日本にもあった。国家や民族の進歩と存続のためという名目で、偏見と差別のもと、人を社会に有用で役立つか、それとも無駄で役に立たないかで区別し、後者の永久的な排除の正当化に利用された。この点でナチスも英米も違いはない。

よく優生学は疑似科学とされ、科学とは無縁と見る向きがあるが、これは誤りである。優生学にも幅があるが、ナチス-米国、英国の優生学は、19世紀後半~20世紀における当時最先端科学の遺伝学と統計学を推進力にしたものだった。回帰分析や、相関、分散分析やカイ二乗検定、p値の有意差判定など、私たちの定量的な解析に欠かせぬ統計手法と概念、それに現代の集団遺伝学やゲノム解析の基礎理論も、全てこの時代に英米で潤沢な研究資金

を得て行われた、優生学研究の中で生み出されたものだ。理由は、R.A. FisherやK. Pearsonを始め、多くの遺伝学者、統計学者が中核的な優生学者だったからだ。ちなみに経済学の重鎮J.M. Keynesは英優生学会の副会長であり、チラノサウルスを記載命名し恐竜を人気者にした進化学者H.F. Osbornは、米優生学会の共同創設者であった。一方で、遺伝学者のT.H. Morganや人類学者のF. Boasのように、一貫して優生学を批判し続けた科学者もいたことを忘れてはならない。問題の本質は、科学か否かにあるのではなく、偏見や差別の正当化のために科学と技術を作り出し、利用した点にある。

つまり優生学は、私たちが偏見や差別意識を持ち、集団の利益のために他者を生産性と効率で序列化するなら、いつでも復活しうる。組織の存続や進歩のため、無駄で役に立たぬ、と判断したら切り捨てる—こうした考えは珍しいものではないし、今の社会ではむしろ評価される訳だが、実はこれこそが優生思想の本質である。いま世界が多様性の大切さを主張するのは、こうしたリスクの認識と歴史への反省ゆえだと思う。あえて多様性の思想と呼ぶなら、それは優生思想とは真逆のものである。

私も曲がりなりに組織の将来を考える立場なので、時に自分が不適切な発想に向かいかねないリスクを感じる。その時には常に、多様性、という言葉を手を自らに言い聞かせるようにしている。多様性は優生学の悪霊を退散させる呪文のようなものであろう。

contents

- 1 巻頭言
- 2 私の東北アジア研究
- 3 新任ごあいさつ
- 4 最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか
- 6 著書・論文紹介
- 8 活動風景

東北アジアから見たロシア史

オレグ・パホモフ

ロシア・シベリア研究分野／助教



ネルチンスク条約(1689年)。清露国境紛争後の清国とロシアとの平和条約。瑣瑣歴史陳列館(黒河市、中国)

私にとって東北アジアの研究は、何よりも中国との関係の研究だ。大部分の東アジア諸国家は、近代以前から始まった中国との複雑で矛盾した関係のもとで形成された。それは儒教の政治伝統の国(日本、朝鮮、ベトナム)であれ、非儒教の政治伝統の国(モンゴル、カンボジア、インドネシアなど)であれ変わらない。

しかし、17世紀になってロシアが東北アジアにやってくる。ロシアは一見すると東北アジア諸国家とは全く違う政治伝統に属する国だった。ある程度、これは事実である。ロシアの国家は、主にビザンティン帝国やヨーロッパとの複雑な関係の結果、全く異なる文化的・政治的環境の中で形成されたものであった。一方、ロシア史を東北アジアから見ると、一つの歴史的傾向がはっきりと見えてくる。それは、ロシア国家の形成に対して中国の影響力が徐々に高まっているということだ。

ここでは簡単に、ロシア国家形成に関する中国の影響の重要な歴史的なエピソードを提示する。

シベリア・極東へのロシア・コサック

到来までの長い期間の中で、中央集権国家としてのロシア国家形成に対して、間接的ながら、しかし重要な役割を、中国は少なくとも二度担っている。

一度目は、ジョチ・ウルスとの君臣関係の結果のモスクワ大公国形成の時である。史学の原則として、ジョチ・ウルスの政治伝統分析はチンギス・カン崇拝に終わる。しかし、このようなアプローチにおいてなおざりにされるのが、チンギス・カン崇拝はモンゴルと中国の何世紀にも渡る相互関係の結果だということだ。遼朝の解体(1125年)に、モンゴル・金戦争(1211～1234年)、そして大元、これらはモンゴルが中国のような全体主義を取り入れたあとの話である。このモンゴル版全体主義をテュルクとモンゴル民族がロシアの地にもたらしたのだ。そしてそれはモスクワ大公国にも、キリスト教終末論のもと、スムーズに取り入れられた。

二度目に中国の間接的で重要な影響があったのは、ピョートル1世の改革における中央集権的官僚主義の誕生の時である。史学では、ロシアにおける官僚

主義の概念は、ヨーロッパ(プロイセン王国、スウェーデン帝国)から入ったとされる。そのヨーロッパの中央集権的官僚主義は、中国から入ってきた。ゴットフリート・ライプニッツ(1646～1716)とクリスチャン・ヴォルフ(1679～1754)が中国官僚主義をヨーロッパに適用した。その後ピョートル1世統治下のペテルブルグで、弟子たちがロシア官僚主義(官等表)を開発している。言い換えれば、ロシア官僚主義とは、ヨーロッパ化された中国官僚主義の適用なのだ。

さらに、シベリア、極東に進出、そしてロシアの北東中国の植民地化は、なによりまずロシアと「Pax Sinica」との直接的相互関係として見るができる。スターリン後のソ連経済は、何より労働力不足に悩まされた。しかし、ソ連と中国の矛盾は、その問題を解決し得る二国間の経済同盟を許さなかった。結果、中国の資本主義経済導入によって、冷戦でのソ連の敗北とアメリカの勝利は確実なものに成った。

以上のように見ると、中国のロシアへの現在の影響の強まりは、原則としてロシアに新しい歴史的状況をもたらすものではなく、中国との複雑で矛盾した関係によるロシア国家形成という大きな潮流が継続しているということを意味する。

オレグ・パホモフ 1981年ロシア・ウラジオストク生まれ。専門：社会人類学、研究テーマ：ロシアと東北アジアの関係史。東北大学東北アジア研究センター助教。著書に『The Political Culture of East Asia: A Civilization of Total Power』(Springer Nature, 2021年)など。

#1

わかり方の違いに悩む



撮影：井上千穂氏

田村光平

基礎研究部門／准教授

たむら・こうへい ▶ 2008年名古屋大学情報文化学部卒業、2013年東京大学大学院理学系研究科修了。ブリストル大学研究員、学際科学フロンティア研究所准教授などを経て現職。

学際科学フロンティア研究所から移籍してきた田村光平と申します。専門は文化現象の定量的解析、になると思うのですが、ステレオタイプの理解を拒みたい気持ちも残っているので、少しだけ来歴を紹介します。2008年に名古屋大学情報文化学部を卒業しました。文理融合の学部で、今は情報学部に変更されたのですが、情報文化学のほうが現代的だと思っています。「計算機を使って思考実験をする」とも形容される「人工生命」の研究室で、「日本語方言の系統ネットワーク」を卒業研究のテーマとしました。東京大学大学院理学系研究科に進み、自然人類学の講座に所属しました。東大の生物は古式ゆかしく「動物」「植物」「人類」と対象で講座が分かれており、「人類学は科学ではない」と他講座から揶揄されることも多々ありました。人類学が考古学などの分野

に対しては「人類学は科学」だと強調することが多いことを考えると趣深いです。2016年に前所属に着任後、当時の同僚が音信不通になったことをきっかけに展示にも関わりはじめ、年1回に近いペースで続けており、2019年にはひっそりと作家の末席にも名を連ねました。

理学部、工学部、文学部に在籍した研究者は少数かと思います。そんな中で感じるのは、「何をわかろうとするか」とともに、「どうわかろうとするか」にも大きな差異があるということです。そうした異なる「わかり方」を行き来できるような枠組みや道具をつくるのが、研究においてめざしていることのひとつです。同時に、評価の枠組みにはめるような力が働いているのが今の大学かと思うので、そこにうまくはまらなくなる努力も続けていく所存です。

中国華北農村コミュニティと集合的記憶の研究

#2

私はこれまで、オーラルヒストリーによる中国人の戦争記憶研究を行ってきました。学部時代に北京に留学したとき、自分が生まれる前の戦争の記憶や侵略の責任について、多くの中国人に問われた経験が、その出発点にあります。それは私が自分とは何かに疑問を持ち、自分自身が歴史の大きな流れの中で定められてしまうことに気付かされた経験でした。以来、私の研究は単に戦争経験者の語りを聞き取るだけでなく、戦争を経験していない人々が如何なる記憶を持つのかということ、社会環境、風俗習慣そしてコミュニティと一人ひとりの関係から検討してきました。私と同様に、中国の人々も否応なく社会や歴史から影響を受けていると考えたためです。目下、日中戦争の最前線であった山西省孟県で42村、300名を超える村人に聞き取り調査をしています。

このインタビューの中から、戦争記憶以外にも様々な関心が生まれ、今に至っています。それは、経済発展著しい80年代に、時代に逆行するかのように復活した雨乞いにも、伝統的コミュニティのレジリエンス、歴史物語の現実社会への影響、土着の物語のヨーロッパへの伝播から東西の思想交流を考えるといった多様な内容ですが、常にインタビューの現場で感じたことに忠実に歩を進めてきました。並行して、オーラルヒストリーの研究手法を通して、歴史学や人文科学は如何に科学的であるのか、そこに介在する研究者の存在をどう捉えるかという問題も考えています。

東北アジア研究センターでは、理系を含む多様な専門の方々との交流の中から研究のアプローチやテーマを広げていきたいと思っています。どうぞ宜しくお願い致します。



石井 弓

基礎研究部門／准教授

いしい・ゆみ ▶ 愛知県出身。博士(学術、東京大学)。東京大学教養教育高度化機構特任助教・特任講師・特任准教授を経て現職。単著に『記憶としての日中戦争』(研文出版、2013)、共著に『変容する記憶と追悼』(岩波書店、2022)など。

#3



根本みなみ

上廣歴史資料学研究部門
／助教

ねもと・みなみ ▶ 筑波大学大学院
歴史・人類学専攻を修了。博士(文
学)。東京大学史料編纂所にて日
本学術振興会特別研究員を経て、
2023年4月より現職。

近世大名の普遍性と独自性の解明

私は大学時代から萩藩毛利家、現在の山口県をフィールドに、大名家やそれに準ずるような上級家臣の「家」にかかわる問題、例えば婚姻や子どもたちの養育、また分家慣行などを研究してきました。江戸時代には各地に大名家が配されましたが、それぞれの大名家で異なる政治機構やその家独自の慣習が存在します。例えば、子どもたちをどのように育てるのか、どういった家と交際を持つのかなどということは大名家がそれぞれ選択をしていくことになりますが、それは大名家や家臣の「家」が辿ってきた歴史の中で規定されるものでした。また、このように「家」が辿ってきた歴史は政治機構や慣習だけではなく、時に「御家意識」「御国意識」とも呼ばれる自己意

識を生み、それは大名だけではなく、家臣や領民たちの行動にも影響を与えました。しかし、それは一つの大名家を見てきただけでは分からないものです。当時の人々も他の大名家に所属する人々との交流を経て、初めて自分たちの独自性を発見し、時にそれを強化したり、また時には自分たちのあり方を見直したりと、様々な選択をしてきました。今回、東北大学に着任したことで、仙台藩伊達家を始めとする東北諸藩も新たな研究対象として取り組んでいくつもりですが、他の地域を研究してきたからこそ見えてくる特徴もあるのではないかと考えています。今回、新たな研究対象を得たことで、今までは気が付かなかった地域の特性を再発見したいと思います。

研究集会

人間文化研究機構グローバル地域研究事業東ユーラシア研究プロジェクト(EES) 2022年度第1回全体集会「東ユーラシアの文化衝突とウェルビーイング」



志宝ありむとふて

(マイノリティの権利とメディア研究連携ユニット／特任助教)

会期 2023年1月21日

会場 東京私学会館(東京都千代田区)

2

2023年1月21日に、東京私学会館で標記集会を開催した。EESは、巨大国家である中国とロシアを抱える東ユーラシアの存在がグローバル世界に及ぼす影響力を、文化の衝突とウェルビーイング(幸福感)という視点

から捉える目的で発足され、初の全体集会である今回は、プロジェクト全体の方向性の確認と、4拠点を含めた関連メンバーの相互交流のあり方を議論するために開催された。

全体集会は①「基礎講演」②「拠点長パネル」③「各拠点メンバー発表」④「拠点間の交流事業についての意見交換会」の四プログラムから成り、「基礎講演」ではプロジェクト代表者、東北大学の高倉浩樹教授が「東ユーラシアの文化衝突とウェルビーイング」というテーマで、この事業全体の目的と目標について述べるとともに、東ユーラシアという枠組みから展望できる地域研究の可能性について報告し

た。「拠点長パネル」では、高倉浩樹(東北大)、島村一平(副代表者・民博)、岡田浩樹(神戸大)、岩下明裕(北大)の各拠点長がそれぞれの拠点の目的と計画を報告し、拠点間協働や交流の方向性等について検討した。

本集会を通じて、プロジェクトの全体としての方向性と、各拠点でのテーマや進捗状況などが共有された。また、各拠点メンバーによる個別の報告と「ウェルビーイング」などの共通課題をめぐる議論を通じてその理解を深めるとともに、各地からの参加者との交流を通じてネットワークを広げることもできた。



EES2022年度全体集会の参加メンバー

社会にインパクトある研究シンポジウム

近代日本の感染症と新型コロナ



竹原万雄

(上野歴史資料科学研究部門/助教)

会期 2023年2月18日

会場 オンライン開催

過

過去の経験は、感染症と共存する社会に何を唆しているのか。本シンポジウムは、疫学・地理学・歴史学の専門家が集まり、感染症をめ

ぐる過去・現代・未来について考えた。

押谷仁氏(医学系研究科)の基調講演「歴史の転換期における新興感染症」では、世界的な視野から新型コロナに至る新興感染症の歴史をとりあげ、国際協力の必要性などが提起された。各講演では、歴史学の立場から川内淳史氏(災害科学国際研究所)が「近代日本における新興感染症の対応過程—1889 ロシアかぜパンデミックから1918 スペインかぜパンデミックまで—」、竹原が「明治期コレラ流行時における交通遮断と地域社会」と題し、統計や新聞資料などを用いながら各感染症への対応を紹介した。地理学からは中谷友樹氏(環境科学研究科)が「近代期の流行誌に残る流行記録の時空間的な復元」

と題し、1906-7年の大阪市のペストや1928-9年の京都市の腸チフスの流行誌の情報を時空間的に復元し、流行の推移などを示した。

パネルディスカッションでは、個人情報の扱いが困難な現代においても未来へ検証可能な記録を残すこと、過去の記録を時代背景をふまえて的確に把握し、各専門分野から多角的に分析・議論することの必要性が話し合われた。過去の教訓を活かすべく、未来に教訓を伝えるべく、学際的な共同を続けていきたい。

コーディネーター

：藤媛媛氏(東北アジア研究センター)

パネルディスカッション・モデレーター

：神代和明氏(医学系研究科)



シンポジウムのポスター

講演会

歴史と記憶のはざまに 一戦後日中関係の語り方について



藤媛媛

(情報拠点分野/助教)

会期 2023年2月21日

会場 東北アジア研究センター・オンライン

2 2023年2月21日に、中国復旦大学日本研究センター准教授・京都大学大学院法学研究科外国人研究員(日本国際交流基金日本研究フェロー)の王広涛先生を招へいし、一般に向けた講演会をハイブリット形式で開催した。講演の題目は、「歴史と記憶のはざまに一戦後日中関係の語り方について」である。

講演では、王先生はまず歴史と記憶との関係性について紹介したうえで、戦後の日中関係の語り方、および、それが日中歴史和解に与える影響について、具体例を取り上げながら話を展開した。歴史は記憶と忘却が混在して作られるため、

歴史問題は過去の事実ではなく、その事実が現在までに、当事者によってどのように語られてきたかというヒストリカル・ナラティブに由来している。日本と中国の間で歴史に対する記憶の接点が欠如しており、また、記憶の「連続性」より「断続性」が顕著になってきたことが、歴史記憶の共有を阻む要因として挙げられた。

本講演会は、東北アジア研究センターが参画している「社会にインパクトある研究」(D2 近隣国理解)プロジェクトの活動の一環として企画・実施された。講演会には学内外から38名の方が参加し、講演後は活発な質疑応答が行われた。



講演会のポスター

オンライン公開

佐藤源之名誉教授最終講義 & 瀬川昌久名誉教授インタビュー

text: 後藤章夫

この春に定年退職された、佐藤源之名誉教授の最終講義の様子と、瀬川昌久名誉教授のインタビュー記事が、それぞれオンライン配信された。

佐藤先生の最終講義は、「東北アジア研究における工学—子持村遺跡からウクライナ地雷への道程」というタイトルで、東北アジア研究センターの公開講演会を兼ねて行われた。前半は講義らしく電磁気学の基礎的な説明から始まり、その後はご自身がセンターで行ったレーダー技術の応用へと話が進んだ。

瀬川先生のインタビューは「中国南部をフィールドとした文化人類学」というタイトルで、東北大学の人文・社会科学分野教員の研究成果を伝える『人社サロン「三太郎の小径」』に掲載された。インタビュアーは岡洋樹教授が務めている。瀬川先生が専門とされる文化人類学とはどのような学問かや、その中でなぜ中国を研究対象に選んだかといったことが語られている。

いずれも配信中なので、ぜひご覧いただきたい。



佐藤先生最終講義

<https://www.youtube.com/watch?v=c7PCi2fr1PU>


瀬川先生インタビュー

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/jinsya/interview1/>


ISBN 9784894893290

規範と模範 —東北アジアの近代化とグローバル化

高山陽子、山口睦 編 風響社 2023年2月刊

text: 山口睦

本書は、中国、モンゴル、カザフスタン、韓国、日本を対象地域として東北アジアの近代化とグローバル化を「規範」と「模範」をキーワードに文化人類学的視点から論じたものである。東北アジアでは、近代化は欧米、つまり外からもたらされたものであり、国家や政府が国民に強いてきたものである。その各地域における近代化は、当該社会に元からある伝統的規範や模範を利用しつつ、変容し、せめぎあいながら普及し

てきた。その様相を、近代から現代までの時間幅をもって、規範と模範の溢れる近代（第一部）、規範と模範の積極的な受容と流用（第二部）、規範と模範からの逸脱と多元化（第三部）に分けて論じた。

なお、本書は、2023年3月に退職された東北アジア研究センター教授であった瀬川昌久先生の退職を記念して企画され、瀬川先生にご指導いただいた国内外の研究者10名が執筆した。



ISBN 978-4-622-09596-5

招かれた天敵

千葉聡 著 みすず書房 2023年3月刊

text: 千葉聡

生物多様性は人間にとって役立つ生態系サービスを提供する、だから守るべき、というのが近年の人間中心主義に基づく保全思想だが、実は生物多様性が役立つ要素ばかりとは限らない。時には甚だしい害をなす。農業害虫などの有害生物がそれである。そこで人間は、その害を時に人工的な武器の破壊力で、また時にその生態系サービスを利用して“やさしく”解決しようと努力してきた歴史がある。本書は

その成功と失敗の歴史を俯瞰し、失敗を引き起こした偶発性の問題、イデオロギーや、科学への過信、無謬主義を明らかにする。また失敗から何を学び、どうすれば意図せぬ失敗の連鎖を防げるのかを提案する。とはいえ筆者も生物多様性の保全を巡り、致命的な失敗をするわけだが、その経緯を通して、あらためて失敗と成功、防除と保全、人工と自然の関係について考えるという構成となっている。



ISBN 978-4-7877-2208-9

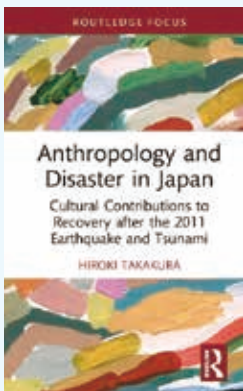
災害〈後〉を生きる —慰霊と回復の災害人文学

李善姬・高倉浩樹 編 新泉社 2023年3月刊

text: 李善姬

本書は、東北大学東北アジア研究センターが進めてきた「災害人文学」ユニット(代表 高倉浩樹)の五冊目の研究成果である。震災から10年以上が経過し、慰霊のあり方とコミュニティ再生にどのような変化があったかを論じている。本書の執筆者は、いずれも東日本大震災から長年間、被災地に通いながらフィールド調査を行ってきた宗教学、人類学、社会学の研究者である。また、執筆者の半分は外国人研究者であり、日本社会が内向きに議論しがちな「災害

と復興」をめぐる問題群に、外部からの視点を持ち込んでフィールド調査をし、分析を行なっている。改めて「外から見る東日本大震災の復興と再生」が本書の主な読みどころとなっていると言える。また、「災害人文学」に関わってきた歴史学研究者や実践防災学の理系研究者からもコラムを寄稿してもらい、災害をきっかけに文理融合研究、産学協同研究、地域還元型研究など、学際研究の成果も報告されている。



ISBN 9781032372396

Anthropology and Disaster in Japan

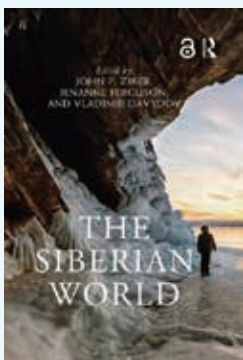
Cultural Contributions to Recovery after the 2011 Earthquake and Tsunami

Hiroki Takakura 著 Routledge 2023年3月

text: 高倉浩樹

本書は、筆者が2011年の東日本大震災以来行ってきた災害人類学研究をまとめた単著の学術図書である。災害に直面した際の人類学的な研究の課題や社会学者としての苦悩の立場を批判的に考察し、文化が災害軽減に果たす役割を考察した。近年の国際的な災害リスク低減政策に即した、文化遺産がリスク管理に果たす役割についても理論的考察を行っている。特に宮城県を中心に、地域の無形文化遺産、農業や漁業における技法と在来知が詳述され、い

かにレジリエンスが機能するか具体的に描写することを心がけた。これら生業における革新的でダイナミックな一面の記述は民族誌的な価値があると考えている。この意味で新しい日本研究を切り開くとともに、民族誌過程に焦点を置いた災害研究として従来にない研究ができたと考えている。Routledge社のRoutledge Focus on Anthropologyシリーズの一冊として刊行された。



ISBN 9780367374754

The Siberian World

John P. Ziker, Jenanne Ferguson, Vladimir Davydov 編 Routledge 2023年3月 text: 高倉浩樹

冷戦崩壊後に世界各地の研究者がシベリアで現地調査を開始した。この30年間にわたる研究成果がまとめられた『The Siberian World』が2023年3月末に刊行された。欧米・ロシア・アジアの58名の研究者による42本の論文で構成され、シベリア研究に必須の視座と知見が中事典的な書籍となっている。言語学・人類学・民族史の分野に関わる日本人研

究者は4名(4編)が寄稿し、国際的なシベリア研究における日本の貢献を示している。私自身は11章「Nature-on-the-move: Boreal forest, permafrost, and pastoral strategies of Sakha people」を執筆し、永久凍土の遅延的水文効果が牧畜文化生成に寄与することを論じた。この本は、The Routledge Worldsのシリーズとして刊行された。

韓国の海洋島での軟体動物調査

木村一貴

(地域生態系研究分野/助教)



私は2年前に地域生態系研究分野に研究員として着任し、本年4月より助教に就任した。専門は進化生態学・保全生物学で、生物多様性の現状・変遷や多様性が生まれる機構、多様性を維持する手法について研究している。研究対象としている生物は主に陸棲・水棲の軟体動物であるが、加えて土壤の扁形動物や節足動物も扱っている。私は本センターに着任する前の数年間、韓国の大学で研究員をしていた。ここではその時スタートさせた研究活動について紹介する。

陸棲の軟体動物(いわゆるカタツムリ・ナメクジ)の分類の知識があり、かつ世界自然遺産・小笠原諸島での研究経験がある研究者を探していた韓国の朴教授と(分類学は専門ではないものの)その条件を満たす人物として朴教授の知人の知人の知人であった私が結びついたことで、私は韓国で研究活動を行うこととなった。朴教授自身は植物分類学が専門であり、私とは研究分

野も対象もあまり類似していない。しかし、海洋島を研究の場の一つとしているという共通点があった。海洋島とは島の誕生以来一度も大陸と繋がったことのない島のことである。そのような島では、偶然たどり着いた少数の限られた生物が独自の進化を遂げることが多く、生物の進化を考える上では格好のモデル系を提供してくれる。日本国内にあるものでは小笠原諸島が代表格であり、韓国には日本海に浮かぶ鬱陵島という島がある。朴教授は鬱陵島の植物の研究に長く力を注いできたが、近年では分類群に拘らず島の生物相全体の多様性・独自性を把握することへの興味を強く感じていた。実は小笠原諸島で著しい多様性を見せる生物の一つが陸棲軟体動物であり、そのことを知っていた彼は特にその分類群の把握を重要視していたのである。彼のプロジェクトの下で研究を行うことになり、まず鬱陵島の陸棲軟体動物についての既存の知見を得ることとした。日本語・韓国語で記述された文献を漁ったり、数少ない韓国の現役陸棲軟体動物研究者に尋ねたところ、ある程度網羅的に調査をしたのは1938年・1980年代末・2000年代末の3回であるようだった。最近の調査になるにしたがって発見される種数が少なくなっていることが理解できた。不安になる傾向である。2010年代末、第4回目となると思われる、私が冬を除いて毎月島に渡って行った調査での結果は、幸運なことに、こ

の傾向に沿ったものとはならないでくれ、第2回目の調査と同程度の在来種を記録することができた(但し、ここまで高頻度で調査が行われたことはないので発見数が増加するのは当然ともいえる)。また、未記録であった在来種を1種類新たに生息確認するに至った。しかし、発見された在来種の多くについては、分布範囲がとても狭かったり個体密度が低かったりと手放しで発見を喜べる状況には思えなかった。第1回調査で報告された在来種の半数近くは、それ以来確認されておらず、ひっそりと絶滅してしまったのかもしれない。実は、陸棲軟体動物、特に島嶼部に生息するそれらの種類は近年最も多く絶滅した分類群だと推測されており、脆弱な生物たちだと言えるのである。

小笠原諸島での多様化パターンとの比較ができるかなと盛り上がっていた朴教授と私にとっては残念な現状を知る結果となったわけだが、環境省主導による、鬱陵島の中央にある山の頂き付近にしか残存していないウツリョウトウマイマイという種の域外保全プロジェクトが開始されるという話も伝わってきており、Covid-19の障害が低下してきた今、私も鬱陵島の更なる調査や現存する種の生活史・繁殖生態を明らかにすることなどを通して崖っぷちに立たされた生物たちの保全に役立ちたいと考えている。

1: 絶滅が危惧されているウツリョウトウマイマイ

編集後記

今号の巻頭言では優生思想が取り上げられました。それが悪であることに疑いの余地はありませんが、その代表格であるナチズムの排除を「口実」に、ロシアはウクライナに侵攻しました。表立っては批判しづらいことに加え、プロパガンダの結果であるにしても、ロシア国内でプーチンの支持率が高いことには、みなが同じ方に向くことの危うさを感じます。その意味でも多様性は重要だと思います。(後藤章夫)



東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所型組織です。

東北大学東北アジア研究センター
ニューズレター 第97号

2023年6月26日発行

編集: 東北アジア研究センター広報情報委員会
発行: 東北大学東北アジア研究センター
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41
TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010

Facebook
をチェック!

